

業界初

X線防護具 点検管理アプリ 『プロテクター管理の匠』、新登場!

「スムーズな点検・管理」と「安全の見える化」をサポート。

無料配布 近日スタート!

詳細が決まり次第、弊社ホームページでご案内いたします。



X線防護具の管理が変わります。

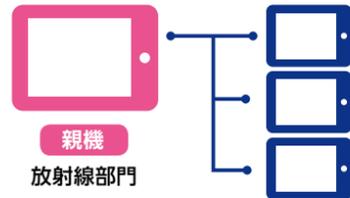
X線防護具の管理は多くの場合、Excelの表による管理台帳で行われています。ただし、記入は手書きが多いため、手間がかかり、施設内で情報共有しづらいことが医療機関のみなさまのお悩みとなっていました。とくに点検記録が共有できないと、不具合のあるX線防護具を気づかず使用してしまう心配もあります。そこで保科製作所は、X線防護具 点検管理アプリ『プロテクター管理の匠』を開発。「スムーズな点検・管理」と「安全の見える化」を通じて、事故・トラブルのない医療現場づくりを支援します。

製品情報の登録も点検記録の入力も、iPadでサクサクと進みます。

『プロテクター管理の匠』はiPad専用アプリケーションです。製品情報の登録は、一着ごとに付属しているQRコードを読み込むだけ*。製造番号、型番、鉛当量、カラー、サイズ、製造年月日などが即座に記録されます。また、定期点検・日常点検の記録は、チェックとプルダウンによるウィザード(対話)形式。フローに沿って進めていけば、点検ももれなく終了します。

*保科製作所の製品に限ります。

●施設全体で情報共有

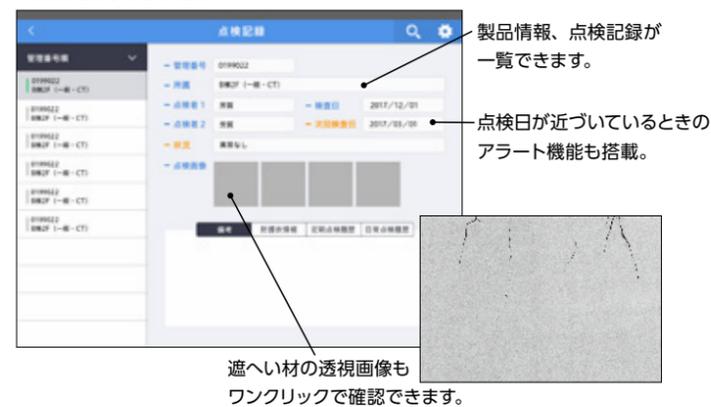


製品情報および日常点検・定期点検の記録は、マスター情報としてiPadの親機に蓄積。その情報は各部門に配置した子機からも簡単に閲覧できます。

情報を閲覧するときはQRコードを読み込むだけ。

QRコードを読み込めば、iPadの画面に製品情報と点検記録をすばやく表示。手元のX線防護具の安全性を確認してから、着用することが可能です。施設内の全製品の情報を共有できるので、部門間でX線防護具が移動したときも保有部門がすぐにわかります。

●点検記録 閲覧場面



遮へい材の透視画像もワンクリックで確認できます。

●定期点検 撮影画面



遮へい材の透視画像の撮影時は、iPadのカメラを装置の画像に向け、撮影ボタンにタッチ。保存した画像は、定期点検の画面に格納されます。

X線防護具 点検管理アプリ『プロテクター管理の匠』は無償です。保科製作所のホームページに会員登録(無料)すると、自由にダウンロードしていただけます。

<http://www.hoshina.co.jp/>

SAFETY FIRST
X線防護用品にできること

医療従事者のみなさまを守るために。

医療安全のヒント

Vol.3

医療機器の安全管理 編



HOSHINA
Since 1913

医療機器の安心・安全は、定期的な保守点検によって保たれます。

医療現場における事故やトラブルを防ぐために、欠かすことができないのが医療機器の安全管理です。

X線防護衣もその一つ。みなさまの職場では、確実な定期点検と情報共有ができていますか？

医療機器の安全管理は

「医療法」で定められています。

平成19(2007)年4月、医療機関の管理・運営等について定めた「医療法」の大きな改正が行われました。中でも重点的に取り組まれたのが“安全確保”に関わる部分です。その一つとして「医療機器の保守点検・安全使用に関する体制」が挙げられ、新たに右のような要件が記載されました。この2年前の「薬事法」の改正でも同趣旨の内容*が盛り込まれており、いずれも“定期的な保守点検”の重要性が強調されています。

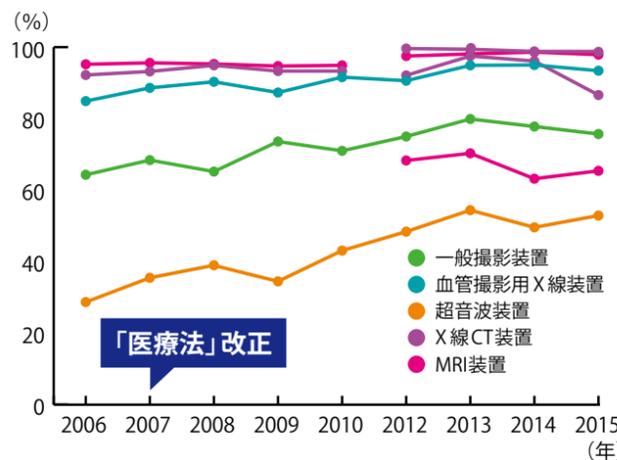
*メーカーの安全管理体制等が定められた「薬事法(現・薬機法)」。平成17(2005)年改正では、「安全上のリスクのある医療機器は“添付文書”(警告や使用上の注意・品目仕様・その他の重要事項を記載した書面)に基づき管理する」ということが明記されました。

伸び悩む、

画像医療システムの保守点検実施率。

画像医療システムの保守点検実施率を見てみると、法改正から10年が経過した現在も必ずしも十分とはいえないのが現状です。一部の機器については診療報酬上の施設基準として保守点検計画書の提出等が求められているものもありますが、全体から見ると保守点検実施率は未だ少ないようです。また、保守点検実施率は徐々に上がってきましたが、装置別にはバラツキが大きく、CT・MRI装置はそれぞれ98%以上となっている一方、一般撮影装置は約75%程度と低水準です。保守点検には施設内で自主的に行う日常点検とメーカーによる定期点検があり、とくに重要なのは後者ですが、費用負担のこともあり、実施率は伸び悩む傾向にあります。

保守点検実施率



* JIRA「第13回 画像医療システム等の導入状況と安全確保状況に関する調査報告書」より抜粋・編集

「医療法」の平成19年改正より

〈安全確保に関する四本柱〉

1. 医療の安全を確保するための措置
2. 医療施設における院内感染の防止
3. 医薬品の安全管理体制
4. 医療機器の保守点検・安全使用に関する体制

ポイント

- 「医療機器安全管理責任者」の設置
- 医療従事者への研修の実施
- 保守点検の計画の作成・実施
- 安全使用のための情報収集・改善策の実施

Notice **たとえば、こんな事故・トラブルが起っています。**



● 患者が入室し、検査を開始しようとしたら、正常に稼働しなかった。

● 撮影後、モニターで画像を確認したら、なにも写っていなかった。

● 天井吊り下げ型の装置が落下した。

● 寝台の駆動中に患者の体の位置がずれたが、安全装置が働かなかった。

● 線量が正しく表示されず、大量のX線の照射を行ってしまった。

事故を未然に防ぐために、定期点検は必ず実施しましょう。

近年は医療機器の買い替え年数が長期化し、ほとんどの装置が10年以上にわたって使用されています。アナログ式の撮影装置に至っては20年間以上使われていることもあります。使用年数が長くなるほど不具合が出る可能性が高まります。不安要素の多い現場は医療機関としての信頼性に関わ

るだけでなく、医師・看護師等の医療従事者にも敬遠されがちです。無用なトラブルを防ぎ、十分な安全性を確保するために、みなさんの施設でも、いま一度、保守点検の実施状況等に目を向けてはいかがでしょうか。

“見える化”が、点検・管理のキーワード。

「JCI(国際病院機能評価機構)」では、X線防護衣の管理が義務づけられています。

JCI*は、「医療の質と患者安全の継続的な改善」を目的として設立されたグローバルな医療評価機関です。JCI認証を取得することはまさに世界水準の医療を提供する医療機関

の証といえますが、世界でもっとも厳しいといわれるこのJCI認証の評価項目の一つに、放射線を使用する際のリスクを軽減するための「X線防護衣の管理」が挙げられています。

* JCI: Joint Commission International. 現在、世界の医療機関の約1%がこのJCI認証を取得、日本でも少しずつ増加しています。

重視されているのが、「点検結果がひと目でわかること」。

X線防護衣の安全評価に関するJCIの要求は細かく、定期点検に関連しては、その実施日や結果の“見える化”が求められています。X線は目に見えないものであり、万一、X線防護衣に不具合があると、気づかぬうちに被ばくする可能性があります。そのリスクから身を守るために、一着一着の状態が「だれにでも、ひと目でわかること」が重要であり、各人がつねにX線防護衣の安全性を確認したり、情報を共有しあったりできる環境が必要だと考えられているのです。



JCI認証を取得した国内の医療施設が実施している“見える化”の例です。同施設が保有するX線防護衣は約700着。型番や点検日などを記載したIDカードを専用フォルダに入れて装着しています。

医療トレーサビリティの観点でも“見える化”は大切な課題です。

一方、医療機器のメーカーには、医療トレーサビリティの確立が求められています。これは、製品が製造・販売され、最終的に廃棄されるまでのすべての流過程を明確にすることをいいます。X線防護衣ももちろん例外ではなく、一着一着がどこの施設でどのような状態で使用されて

いるかがつねに可視化されることで、メーカーは販売後の安全確保や修理のサポート、今後の改善などに結びつけることができます。それを実現するためにも、各施設におけるX線防護衣の情報の“見える化”は欠かすことができません。



X線防護衣の安全管理のポイントは、「正しい収納」と「定期点検」。

収納

X線防護衣は2枚の表面材で遮へい材を挟み込んだ積層構造です。紙を何度も折りたたむとそこから傷んでいくように、遮へい材も折りたたんだり、無造作に置いたりを繰り返すと亀裂や穴が生じやすくなります。使用後は必ず専用ハンガーに掛けて保管してください。



定期点検

6カ月に1度を目安にX線透視検査を行い、遮へい材の状態を確認してください。

遮へい材に亀裂が見つかったX線防護衣



X線透視画像

遮へい材を取り出してみると...